

経済学

問題

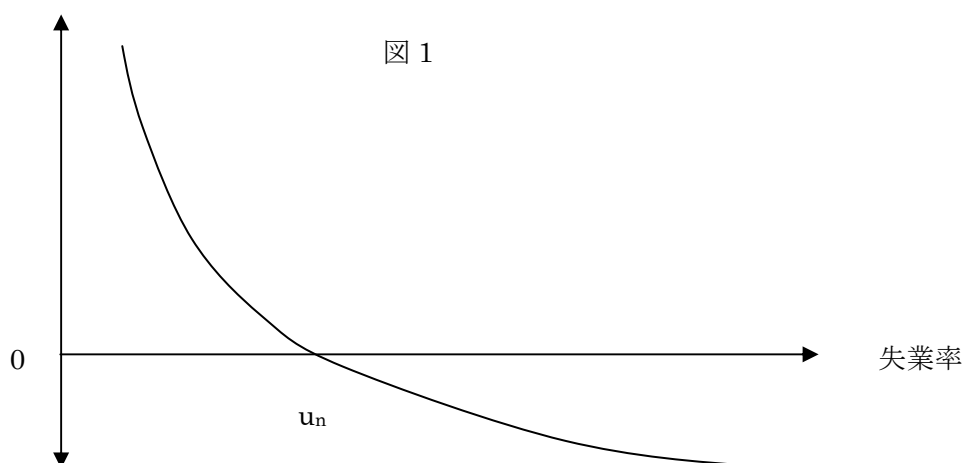
自然失業率仮説について、フィリップス曲線を用いて説明せよ。

解答例

自然失業率とは、経済の中で自然に発生する失業率のことで長期的に失業率が落ち着くとされる失業率のことである。経済においては、転職途中の人は常に存在し、また希望の仕事があっても情報不足のため到達できない人もおり、失業率は 0 となることはなく、完全雇用の状態においても失業者はいると考えられる。このときの失業率を自然失業率とよぶ。ここで発生する失業者は摩擦的失業者や構造的失業者ということになる。

この仮説について、フィリップス曲線を用いて以下説明する。
フィリップス曲線とは、失業率と名目賃金上昇率の関係を示した右下がりの曲線であり、統計的に発見されたものである。(図 1)

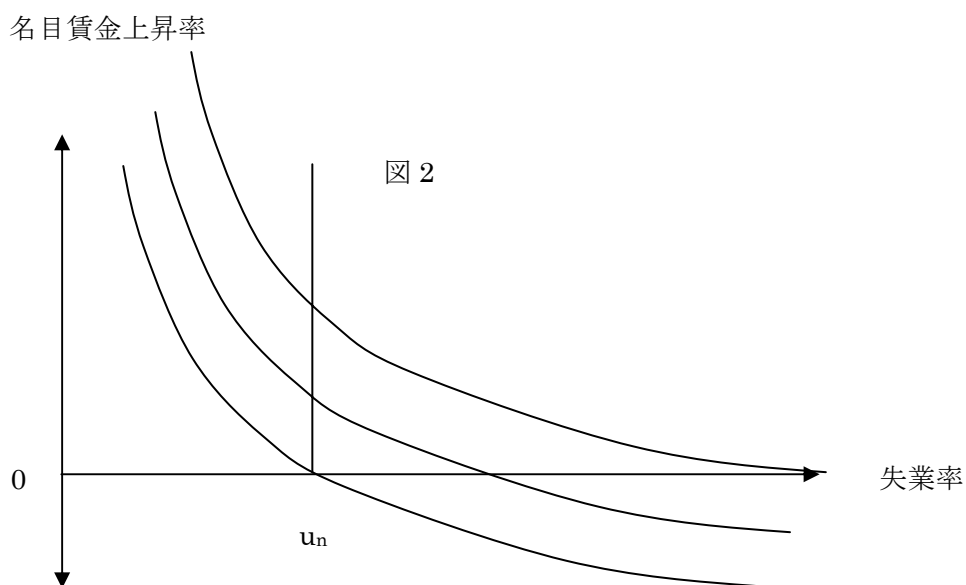
名目賃金上昇率



労働市場において、賃金は需給のミスマッチを反映して変動すると考えられる。この仮定にたてば、賃金上昇率が0になるところで完全雇用であると考えることができる。このことを図1のフィリップス曲線を見ると失業率が u_n の水準で名目賃金上昇率が0になる。つまり、ここが事実上の完全雇用であるということになる。

このように、フィリップス曲線をもとにすると失業率が0でなくても、名目賃金上昇率が0になる失業率水準があることが確認され、この u_n の失業率の水準を自然失業率水準という。

長期的に経済が市場メカニズムにより完全雇用を実現することができるとし、さらにインフレ率と物価上昇率が等しいという仮定をおくと、名目賃金率が上昇しても物価の上昇により実質賃金率は変わらない。すると名目賃金率が上昇しても、実質賃金率が変わらないため労働者は長期的には労働供給量を自然失業率水準から変えないので、失業率は長期的には自然失業率になり変化しないということになる。



このように長期的には名目賃金上昇率がいくらであっても、失業率は自然失業率水準に落ち着くので、自然失業率水準のレベルで垂直になる直線を長期フィリップス曲線と呼ぶ。

以上

財政学

問題

公債の特徴を租税の特徴と対比して説明し、公債発行に伴うクラウドイング・アウト効果についても言及せよ。

解答例

公債とは、国又は地方公共団体が資金調達のために発行する債券である。政府が資金を調達する方法（歳入）としては、その他に租税が考えられるが、公債は租税とは次の点で異なる。

1. 強制ではなく個人の自発的な購入意欲に基づいている。
2. 租税と異なり、貯蓄のみを減らす。（租税は可処分所得全体を減らす）
3. 将来的に有利子で返済が必要である。

ここでは、この2点について、クラウドイング・アウトとの関係で述べる。

まず、クラウドイング・アウトであるが、政府による財政活動が民間の経済活動を締め出してしまうことを言う。こうしたクラウドイング・アウトは公債発行の時のみ発生するわけではなく、財政支出拡大を含めた様々な場合に発生する。ここでは題意に沿って、公債発行の時に発生するクラウドイング・アウト効果について言及することとする。

公債発行によってこのクラウドイング・アウトが発生するメカニズムであるが、公債を発行することにより、貯蓄が減少してしまうことが主な理由となる。

個人にとって公債は自発的に購入するものだがその購入目的は資産の運用である。すなわち貯蓄の代わりに公債を購入するわけである。そのため、公債を発行すると同額の貯蓄が減ってしまうことになる。一国においては貯蓄＝投資であるので、貯蓄の減少はそのまま投資の減少を招くことになる。つまり、民間投資が締め出されてしまうわけである。

こうした貯蓄の投資は、企業にとっては今期必要な投資がなされないことを通じて将来の生産性を落とさせることにつながる。

また、公債が将来返済が必要となることから、将来に政府が増税をすることが予想される。増税が行われれば、可処分所得の減少を通じてさらに民間の貯蓄は減少してしまうので、ここでも民間投資の減少を招くことになる。

以上